

## 研究ノート

受付：2017. 9. 8

受理：2018. 1.18

## 介護総合実習履修前における学生の介護に対する考え方

藤 原 秀 子

日本福祉大学 健康科学部

武 田 啓 子

日本福祉大学 健康科学部

水 谷 なおみ

日本福祉大学 健康科学部

久 世 淳 子

日本福祉大学 健康科学部

丹 羽 啓 子

日本福祉大学 健康科学部

間 瀬 敬 子

日本福祉大学 健康科学部

Impressions of care among university sophomores  
in education course for certified care workers

Hideko Fujiwara

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Keiko Takeda

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Naomi Mizutani

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Junko Kuze

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Keiko Niwa

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Keiko Mase

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Keywords: 介護学生, 介護に対する考え方, 介護総合実習

## 1. はじめに

2007年に社会福祉士及び介護福祉士法等の一部が改正された<sup>1)</sup>。介護福祉士に関わる改定は、定義規定の見直し、義務規定の見直し、資格取得方法の見直しである。定義規定の見直しでは、「入浴、排せつ、食事その他の介護」から「心身の状況に応じた介護」に改められ認知症などの心のケアを含めた心身の介護へと改定されている。義務規定の見直しでは、現行の「信用失墜行為の禁止」「秘密保持義務」「連携」「名称の使用制限」に加えて、「誠実義務」「資質向上の責務」が新たに追加された。「誠実義務」では、個人の尊厳の保持と自立支援があげられている。そして「資質向上の責務」では、他のサービス関係者との連携や資格取得後の自己研さんが追加されている。資格取得方法の見直しでは、介護福祉士を取得しようとする者に対して、一定の教育プログラムを経た後に国家試験を受験する形で資格取得方法が一元化され、介護福祉士養成施設（以下養成施設とする）で介護を学ぶ学生も国家試験を受験することとなった。このような見直しがなされ、介護を必要とする幅広い利用者に対して基本的な介護を提供できる能力を修得することを目指し厚生労働省<sup>2)</sup>は資格取得時の到達目標の11項目を示している（表1）。

本学では、この11項目を踏まえて介護実習の目標を掲げている<sup>3)</sup>。介護実習は1年生の後期に介護実習（12日間）と介護実習（3週間）、2年生の後期に介護総合実習（5週間）を実施しており、介護実習を積み重ねていくなかで11項目の到達目標が修得できるようにしている。介護実習の最終段階となる介護総合実習の目

標では、介護実習・で修得した知識や技術をもとに、一人の利用者を担当し介護過程の実践力を養い、介護過程を展開していくなかで自己覚知の必要性に気づき状況に即した表現ができることなどを目標としている。そして、介護に携わる専門職者としての自己の介護観を明確にしていくことを目的としている。

山下<sup>4)</sup>は、「介護観を確立するには、その背景となる、知識や倫理そして経験が必要であり、これはカリキュラムに於ける様々な講義と実習、さらには日々の様々な生活体験が基盤となる」など、介護観を形成していく中で、介護実習の教育が大きく影響していることや学内での知識、倫理などが重要であることは、これまでの研究でも明らかになっている。さらに、石田ら<sup>5)</sup>は、「教員と同様、実習指導者が学生とどのように関わり、どのような指導を行い、どのような事を語り合うかが、学生の介護観に大きな影響を与えている」と述べており、学校での教育だけではなく実習指導者との関わりも介護観を構築するためには重要であることが示唆されている。ただし、これらの研究は介護総合実習を終了した学生に対し介護観についてのレポートを作成させ、その記述内容から何が介護観の形成に影響を与えているのかなどを明らかにした。しかし、介護観がどのようなプロセスを経て形成されているのかについては研究がなされていない。

そのため、本学介護学専攻に所属する2年生に対して介護総合実習履修前の介護に対する考え方を明らかにし、入学時との相違を検討することで介護観の形成プロセスを探る際の一助とする。

表1 資格取得時の到達目標

1. 他者に共感でき相手の立場に立って考えられる姿勢を身につける。
2. あらゆる介護場面に共通する基礎的な介護の知識・技術を習得する。
3. 介護実践の根拠を理解する。
4. 介護を必要とする人の潜在能力を引き出し、活用・発揮させることの意義について理解する。
5. 利用者本位のサービスを提供するために、多職種協働によるチームアプローチの必要性を理解できる。
6. 介護に関する社会保障の制度、施策について基本的理解ができる。
7. 他の職種の役割を理解し、チームに参画する能力を養う。
8. 利用者ができるだけなじみのある環境で日常的な生活が送れるよう、利用者ひとりひとりの生活している状況を把握し、自立支援に資するサービスを総合的、計画的に提供できる能力を身につける。
9. 円滑なコミュニケーションの取り方の基本を身につける。
10. 的確な記録・記述の方法を身につける。
11. 人権擁護の視点、職業倫理を身につける。

（厚生労働省，2007）

## 2. 目的

入学時と介護総合実習履修前の介護に対する考え方の相違を検討する。

## 3. 調査方法

### 3.1 調査対象

本学介護学専攻2年生 30名（男性：13名，女性：17名）

### 3.2 調査方法

介護福祉論 の講義最終日に授業内でレポートを課した。テーマは「介護に対する考え方」とし、「入学時と現在で変わったこと」、「変化したきっかけ」とした。

### 3.3 分析方法

提出されたレポートの記載を「入学時の考え」（以下「入学時」とする）、「現在の考え」（以下「現在」とする）、「変化したきっかけ」に分類し、同じ内容について記載されているものを整理しカテゴリー化した。カテゴリー化に際しては、全研究メンバーで確認をした。

### 3.4 倫理的配慮

本学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会規定に従い、事前に、本調査の目的、方法、趣旨を学生に説明し、調査内容が成績評価に影響しないこと、および個人が特定されないことを口頭で説明した。その際、結果を介護教育の成果として論文にまとめることのできることを得た。

## 4. 結果

有効回収数 27 名（回収率 89.9%）であった。性別は、男性が 11 名（40.7%）、女性は 16 名（59.3%）であった。

レポートから抽出された介護に対する考え方の記載は 163 件であった（表 2）。入学時の介護に対する考え方については 53 件、現在の介護に対する考え方については 110 件の記載があり、入学時の約 2 倍になった。以下、入学時と現在のカテゴリー・サブカテゴリーについて結果を述べる。「%」は、入学時の 53 件および現在の 110 件に対する割合である。

### 4.1 入学時の介護に対する考え方

入学時の介護に対する考え方は、「介護の実践の捉え方」34 件（64.2%）、「介護に対する理解」15 件（28.3%）、「介護に対する興味」4 件（7.5%）の 3 つのカテゴリーとなった。もっとも記載が多かった「介護の実践の捉え方」のサブカテゴリーは 7 つとなった（表 2）。もっとも記載内容が多かった内容は「介護者が一方的に介護するイメージ」11 件（20.8%）で、その記載内容としては「お世話をする」や「介護者が一方的に介護をする」、「全介助」などの介護者がすべてお世話することが介護と考えている内容であった。次に「できないことだけをサポートする」6 件（11.3%）で、その記載内容として「できないことだけをサポート」、「困っていることだけをサポート」の記載があり、利用者のできないところだけを介助をすればよいのではないかという記載があった。次に「誰にでもできる仕事」が 5 件（9.4%）となり、「誰にでもできる」や「コミュニケーション」、「淡々と作業」の記載があった。次に「価値」が 4 件（7.5%）となり、「やりがいがある」、「楽しそう」などの記載があった。次に「心理的・社会的負担」と「マイナスイメージ」がともに 3 件（5.7%）であった。「心理的・社会的負担」の記載内容は「人間関係」、「重労働」、「腰痛」の記載があった。「マイナスイメージ」の記載内容は、「マイナスのイメージが強い」、「マイナスなイメージばかり」などマイナスという言葉がそのまま記載されていた。そして、サブカテゴリーの 6 つ目として「身体的負担」2 件（3.8%）であった。記載内容は「辛い」、「ストレス」の記載内容となった。

次に記載が多かったカテゴリー「介護に対する理解」のサブカテゴリーでの記載内容は「基本的知識・技術の未修得」13 件（24.5%）であった。その記載内容として「介護を軽く考えていた」や「介護過程を知らなかった」、「勉強をする必要がない」などの記載があり、介護は知識が無くてもできるのではないかと考えている内容であった。次に「対象者の理解」が 2 件（3.8%）であった。ここでの記載内容は「自立支援を考えていなかった」という利用者のできる能力を理解せずに支援する内容と、「利用者の方が満足していただけの介護」という利用者を理解して適切な支援をする必要があるという記載がみられた。

そして、「介護に対する興味」のサブカテゴリーと

表2 介護に対する考え方（入学時と介護総合実習履修前）

カテゴリー	入学時 (n=53)				介護総合実習履修前 (n=110)			
	サブカテゴリー	要 約	件数	%	サブカテゴリー	要 約	件数	%
介護の実践の捉え方	介護者が一方的に介護する	お世話をする	5		すべて世話をすることではない	すべて世話をすることではない	2	
		介護者が一方的に介護をするイメージ	3					
		全介助	3					
		小合計	11	20.8%		小合計	2	1.8%
	できないところだけをサポートする	できないとこだけをサポート	5		アセスメント	1人ひとりにあった支援	8	
		困っているとこだけをサポート	1			利用者のニーズを考える	2	
						利用者と一緒に考える	1	
						環境を利用者に併せる	1	
						家族のニーズを踏まえての支援	1	
						町で見かける人達もアセスメントするようになった	1	
		小合計	6	11.3%		小合計	14	12.7%
	誰にでもできる仕事	誰にでもできる	2		誰にでもできる仕事ではない	コミュニケーション技術	5	
		コミュニケーション	2			知識・技術・能力が必要	4	
		淡々と作業	1			誰にでもできる仕事ではない	1	
		小合計	5	9.4%		効率性	1	
	価値	やりがいがある	2		価値	深く大変な仕事	9	
		楽しそう	1			やりがいがある仕事	3	
		実技が一番	1			利用者が「かわいい」ことに癒された	1	
		小合計	4	7.5%		「ありがとう」と言ってもらえた	1	
						楽しいことが多い	1	
介護に対する理解	心理的・社会的負担	人間関係	1		基本的知識・技術の未修得	現場で経験を重ねたいという気持ちもある	2	
		重労働	1					
		腰痛	1			小合計	2	1.8%
		小合計	3	5.7%	基本的知識・技術の修得	連携が必要	6	
	マイナスイメージ	マイナスイメージ	3			視点	4	
						観察	3	
		小合計	3	5.7%		記録	2	
	身体的負担	辛い	1			認知症の知識	2	
		ストレス	1			法の知識	2	
		小合計	2	3.8%		柔軟性	1	
		合 計	34	64.2%		思いやり・愛情	1	
						小合計	21	19.1%
	対象者の理解	自立支援を考えていなかった	1		対象者の理解	利用者理解	11	
		利用者の方が満足していただける介護	1			自立支援の視点	8	
		小合計	2	3.8%		利用者主体	4	
						心のケア	3	
		合 計	15	28.3%		小合計	26	23.6%
介護に対する興味	否定的興味	あまり興味がない	3					
		介護希望ではない	1					
		小合計	4	7.5%				
自分自身の変化		合 計	4	7.5%		合 計	0	0.0%
	自分自身の成長	自分の成長	5		自分自身の成長	自分の成長	5	
		知識が増えた	2			知識が増えた	2	
		考えが深まった	2			考えが深まった	2	
	マイナスの変化	考えるようになった	2			考えるようになった	2	
		介護は自分のためである	1			介護は自分のためである	1	
		経験していくことで、大きい人間になれる	1			経験していくことで、大きい人間になれる	1	
		考えは180 変わった	1			考えは180 変わった	1	
		意識するようになった	1			意識するようになった	1	
		小合計	15	13.6%		小合計	4	3.6%
		合 計	0	0.0%		合 計	19	17.3%

「%」：入学時の53件および介護総合実習履修前の110件に対する割合

して「否定的興味」が4件(7.5%)であった。「否定的興味」の記載内容は、「あまり興味がない」、「介護希望ではない」といった介護に興味をもっていない記載であった。

#### 4.2 現在の介護に対する考え方

現在の介護に対する考え方については、「介護の実践の捉え方」42件(38.2%)、「介護に対する理解」47件(42.7%)、「自分自身の変化」19件(17.3%)の3つのカテゴリーとなった(表2)。

まず1つ目の「介護の実践の捉え方」のサブカテゴリーは4つとなった。もっとも記載が多かった内容は「価値」15件(13.6%)であった。その記載内容として「深くて大変な仕事」、「やりがいがある仕事」という記載があり、入学時の「心理的・社会的負担」や「身体的負担」などの大変な仕事という否定的な捉え方ではなくなっていた。次に多いサブカテゴリーは「アセスメント」14件(12.7%)であった。その記載内容は「一人ひとりにあった支援」、「利用者のニーズを考える」など利用者一人ひとりを理解し対応して行く必要があることの記載や、「環境を利用者に併せる」、「家族のニーズを踏まえての支援」など利用者だけを見るのではなく、利用者に関わる環境因子についても考えている記載があった。次の「誰にでもできる仕事ではない」が11件(10.0%)で、「コミュニケーション技術」や「知識・技術・能力が必要」など介護するには知識や技術が必要と考えている記載があった。そして、「すべて世話をすることではない」が2件(1.8%)であった。

2つ目のカテゴリー「介護に対する理解」のサブカテゴリーは3つとなった。もっとも記載が多かった内容は「対象者の理解」が26件(23.6%)であった。その記載内容として「利用者理解」や「自立支援の視点」、「利用者主体」などの記載があった。次に「基本的知識・技術の修得」が21件(19.1%)であった。その記載内容として、「連携が必要」、「視点」、「観察」、「記録」などの記載があった。そして「基本的知識・技術の未修得」で2件(1.8%)であり、「現場での経験を重ねたいという気持ちもある」との記載があった。

3つ目の「自分自身の変化」のサブカテゴリーは2つとなった。記載が多かった内容は「自分自身の成長」が15件(13.6%)であった。その記載内容は「自分

の成長」をあげており、具体的な内容として「知識が増えた」、「考えが深まった」など入学してから1年半で自分自身が変化していることの記載がみられた。そして次に、「マイナスの変化」が4件(3.6%)であった。記載内容として「学内と実習施設との相違」をあげており、そのことによって「モチベーションが下がる」と記載している。

#### 4.3 変化したきっかけ(複数回答)

入学時の介護に対する考え方から介護総合実習を履修する前までの介護に対する考え方が変化した理由としては「大学での学び」をあげている学生が17名(63.0%)、次に、1年生の「介護実習」をあげている学生が15名(55.6%)いた。

その他として、12名(44.4%)の学生より今後に向けての記載がみられた。介護総合実習を履修する前にレポートを課したため、「より良い考え方・行動ができるようになりたい」、「利用者のニーズをきちんと受け止め考えられる介護をしたい」、「自分の中の介護観を確立させることができるようにしたい」など介護総合実習に向けて意欲が感じられる内容の記載があった。

### 5. 考察

入学時と介護総合実習を履修する前の介護に対する考え方について、それぞれ3つのカテゴリーが抽出された。入学時と介護総合実習を履修する前で共通してあがったカテゴリーは「介護に対する理解」と「介護の実践の捉え方」の2つのカテゴリーであった。それらのサブカテゴリーの内容は全く異なる内容となっている。入学時の「介護に対する理解」では、介護を軽く考えていた、介護過程を知らなかった、知識がなかったなど介護に対しての基本的知識・技術を知らなかったと自己を振り返っている。大半の学生は高校を卒業したばかりで、そのまま本学に入学しており介護に関する専門的な講義・演習を履修していない。介護の基本的な知識・技術ともに理解ができていないことから、利用者主体として考えることが重要な自立支援などに至らなかったといえる。さらには、この「介護に対する理解」が乏しいため入学時の「介護の実践の捉え方」にも影響していると考えられる。基本的な知識・技術が修得できていないことで、利用者を正しく理解することが難しくなり、必然的に利用者の



表面的な部分のみを捉えることとなる。そのため、介護者が一方的に介護をする、できないところだけをサポートするなど介護者主体で介護実践を行うことが介護だと考える学生が多く占め、知識・技術がなくとも介護とは誰にでもできる仕事として捉える傾向となった。また、「介護の実践の捉え方」では、介護は身体的・心理的・社会的負担があると記載している。福祉人材確保対策検討会資料<sup>6)</sup>のなかに、介護の情報を入手する手段としてもっとも高いのが「テレビのニュース」となっており、次に「テレビのワイドショー」となっている。そのため学生自らが介護についての情報を入手しているのではなく、介護現場で何らかの問題が起きたときに報道される内容を多く入手するため、学生は、辛い、ストレス、重労働などマイナスイメージを強くもっていると考えられる。朝倉ら<sup>7)</sup>は高校生のインタビューから「高齢者や認知症の実像が正しく把握されておらず、その原因は高齢者や関連施設に関わる機会の少なさである」さらには「介護職の待遇に対する報道や介護職員における事件の報道で介護職に対するイメージは“自分はやりたくない仕事”と位置付けられてしまっている」と述べている。そのため、本学の学生も介護について正しい知識が不足しており、介護は辛い、大変な仕事になっていると考えられる。このように「介護の実践の捉え方」をしている学生が少なくはないため、「介護に対する興味」のカテゴリーでも、介護に対してあまり興味がない、なかには介護希望ではなかったとレポートに記載している学生もあり、介護に対して否定的な興味を示す学生がいた。しかし、入学してきた学生のなかには高校から介護を学んでいる学生もあり、介護の体験をしたことがある学生は介護の大変さを知りながらも、それ以上にやりがいがあると感じている学生もいた。

現在の「介護に対する理解」については、基本的知識・技術の修得と対象者の理解の2つのサブカテゴリーが増加した。大学で1年半介護について学び、介護実習・

を経験した事で、観察、記録、連携が必要など介護過程を展開していくなかで重要となってくる視点ならびに認知症や法の知識が重要になってくることを学び、その考えが養われていると思われる。そして、学生は、利用者理解、自立支援の視点、利用者主体で介護を展開することにより、対象者の理解も深まっていく様相が窺えた。このように「介護に対する理解」が深まっていることから、「介護の実践の捉え方」について入学時と比べ肯定

的な内容へと変化したと考える。介護総合実習を履修する前の学生は、介護実践をしていくためにアセスメントの重要性について養われていることが窺える。そのアセスメントをしていくためには専門的知識・技術が必要であり誰にでもできる仕事ではないとの考えに変化し、介護に対する否定的興味は皆無になったと思われる。これらの変化が「自分自身の変化」となり、入学時にはなかったカテゴリーとなった。現在では自分自身の成長として、知識が増えた、考えが深まった、考えるようになったなど入学時より現在の自分自身が成長していることを実感している。しかし、学生は介護実習を体験したことで、学内で学んだ介護の知識と技術の基本との相違を感じていた。入学時から現在までの学内での知識・技術などの学びを自分自身のものにするために介護実習・の体験を繰り返す。そのなかで様々な経験を繰り返しながら対象者の理解を深めていき価値観を形成していくと考える。しかし、同じような体験をしたとしても学生一人ひとりの捉え方が違うと思われ、その体験で学生自身が何を考え、どう感じているのかを明確に言語化することが重要になると考える。石田ら<sup>5)</sup>は「学生の肯定的介護観の形成を促すためにも、実習 から実習 ,そして実習 へと、ステップアップしていく節目、節目で『介護観』を言語化し、内面化していく必要がある」と述べている。さらに平澤<sup>8)</sup>は「自己の考えや行動の変化に気づき成長を認識することは、次の目標に繋がる大変重要なことである」と述べている。学生が介護実習を積み重ねていくなかで、介護に対する考え方を言語化していくことで、学生一人ひとりの価値観が養われていく。現在までに養われた基本的知識・技術を介護総合実習で応用していくことで、介護観の形成プロセスにも影響を与えると考える。介護総合実習を履修する前の学生は介護に対する思いに留まっており、明確な介護観に至っていない。つまり、この時期は介護観に至るまでのステップ段階であるといえる。だからこそ介護観を形成させるためには、介護総合実習を体験することは重要な意味をなしており、介護現場で介護実践を経験することは現在の考えを確たる介護観にしていく大切なプロセスの1つであるといえる。

最後に本研究の限界と課題を述べる。本研究では、学生に対し、2年次7月にレポートを課し入学時の介護に対する考え方をまとめてもらった。入学時から時間が経過していることもあり、やや信憑性に欠ける点は否めな

い。また、入学時の介護に対する考え方は、学生の期待や希望が反映されると推測できるが、今回の分析結果はネガティブな傾向を示した。その要因の一つとして、現在の自分を肯定的に受け止めているか否かが、入学時を振り返る際のバイアスになったと考えられる。つまり、学生が入学時よりも成長していると感じていればいるほど、入学時との落差は大きく、入学時の考え方をネガティブに捉えがちになった可能性がある。今後、学生の入学時から介護総合実習の履修後、さらには卒業時の介護に対する考え方、介護観についても把握し、介護観の形成プロセスについて検討していく必要がある。

## 6. おわりに

厚生労働省が示している資格取得時の到達目標に学生が卒業するまでに到達するためには、学内での学びおよび介護実習での介護実践を積み重ねていくことが重要であり、このようにして介護福祉士としての介護観の形成プロセスが養われていく。そして、さらに介護観を確たるものにしていくためには介護総合実習が重要なプロセスである。学内での学びと介護実習で修得した知識・技術を学生一人ひとりが介護総合実習で応用できるように指導していく必要がある。そのためには教員と指導者が連携し、介護教育を展開していくことが重要になる。今後も学生の介護観の形成プロセスに何が大きく影響しているのかを検討していきたい。

## 謝辞

本研究を行うにあたりご協力いただいた学生の皆様をはじめ、関係者の皆様に深く感謝いたします。

なお、本研究は JSPS 科研費 JP16K04717 における研究の一部です。研究の機会をくださいましたことを感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 社援発第 1205003 号「社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律について」平成 19 年 12 月 5 日
- 2) 厚生労働省：社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律（平成 19 年法律 第 125 号）平成 19 年 12 月 5 日
- 3) 2017 年度介護実習のてびき：日本福祉大学健康科学部リハビリテーション学科介護学専攻，pp. 2 (2017)
- 4) 山下喜代美：卒業を直前にした介護福祉コースの学生の介護観と今後の不安．東京福祉大学・大学院紀要，1 (1)，pp. 39-47 (2010)
- 5) 石田京子・小田史・田中真佐恵・鴻上圭太・上山小百合・山田義秀：短期大学における介護学生の卒業時の介護観の検討 - 授業・実習との関連と新カリキュラムへの課題 - ．大阪健康福祉短期大学紀要，10，pp. 3-14 (2011)
- 6) 厚生労働省：第 7 回福祉人材確保対策検討会平成 26 年 10 月 14 日，  
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyo-kushougai-hoken-fukushibu-Ki-kakuka/3.koseinshiryo.pdf>
- 7) 朝倉和子・西口守・千葉一博：中高生の高齢者介護・福祉分野へのイメージと社会貢献意識との関係性の研究，東京家政学院大学紀要，56，pp. 13-25 (2016)
- 8) 平澤泰子：介護福祉士養成施設における学生の介護福祉実習での学び - ポートフォリオを实践して - ，浦和大学・浦和大学短期大学部，浦和論叢，47，pp. 63-80 (2012)

## 参考文献

- 1) 水谷なおみ：介護福祉士の養成教育 -健康科学部リハビリテーション学科介護学専攻を例にして - (日本福祉大学看護実践研究センターシンポジウムより)，FD (ファカルティデベロップメント) 推進を目指して，13. pp. 22-26 (2017)
- 2) 横山正博・三原博光：介護福祉士養成施設の学生に関する意識調査，川崎医療福祉学会誌，8 (1)，pp. 31-37 (1998)
- 3) 吉田清子・鈴木聖子・阿部明子・柏葉英美：介護観の分析からみた介護実習の効果評価研究，岩手県立大学社会福祉学部紀要，17，pp. 43-49 (2015)